

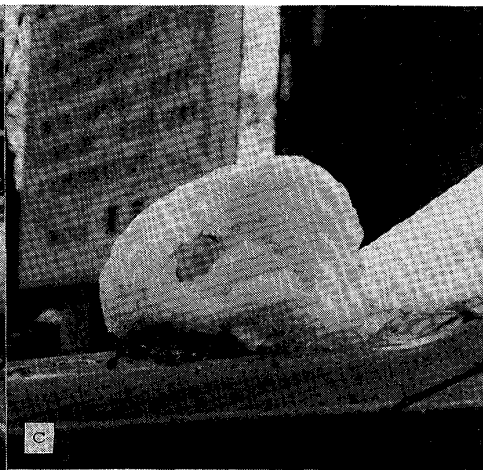
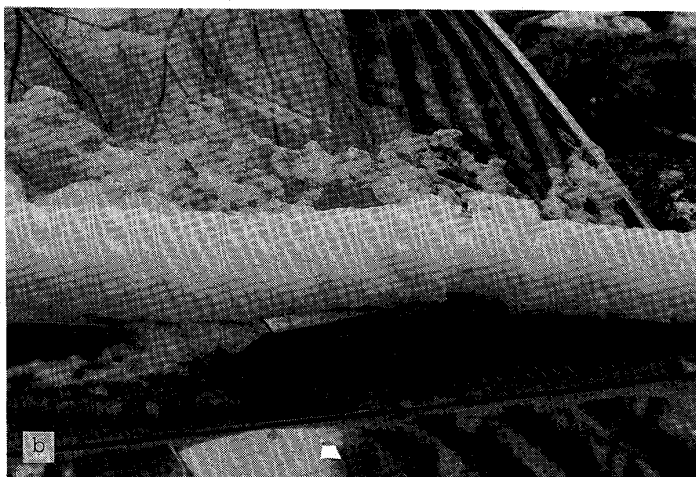
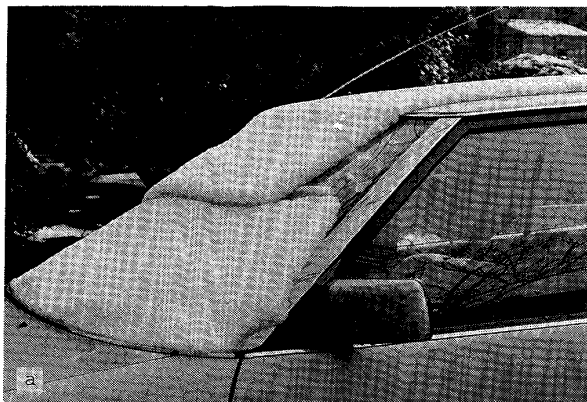
コ ラ ム

ゆきのあと

これでは発進できないですねえ(a)。こんな雪は人手でさつと払えるのですが、放っておくとどうなるのでしょうか。2月3日節分の日昼下がり、工学部構内を歩きまわってロール状になつてのを二例(b, c)だけ見つけました。フロントガラス上の積雪のもぐり込み(aとは逆に)を受けてロールを形成したと推定するのですが、まちがいかもかもしれません。

我々としては新発見と意気込んだのですが、写真屋のお兄さんには「こんなのはスキー場に行くといくらでもあるよ」といわれました。本コラムが夏の号にでて、読者諸兄の一涼に寄与するのを祈るばかりです。

(東京大学工学部 辻川茂男)



編集後記

かなり以前からの傾向であるが、昔の「鉄と鋼」からは想像できないような分野の記事が増えている。これはとりもなおさず、今日の鉄鋼業界が目指している新しい形態の素材産業への脱皮を指向したものである。編集委員会の中でも、そのうち「鉄と鋼」の半分くらいは鉄以外の素材を対象とするものになるのではないか、あるいはそうなるべきであるという議論がある。

鉄で培った技術の新しい分野へ拡げるためには、フィージビリティ・スタディに基づいた目標設定が必要と思うが、そのためのシーズ探索には情報入手が第一歩であろう。「鉄と鋼」を最も手近な情報源として活用していただけたらと思う。

たいていの技術者/研究者には自分の受けた教育や経験をバックとした固有の分野があり、そこから離れるには相当の勇気と努力が要る。しかし、今日の「鉄と鋼」読者に期待されているのは既存のフィールドに

とらわれない柔軟な試行あるいは思考であると思う。このための刺激として、異分野あるいは学際的な学問・技術の動向を注視する必要がある。

以前に読んだ、米国の大統領への科学技術諮問委員会からの材料開発に関するレポートの中で、新しい技術の開花には「材料」と「エネルギー」に加えて「情報」という三つのキーワードが必要というのがあつたと記憶しているが、私見によればもう一つ「情熱(パッション)」が不可欠のように思う。

その道の専門家であれば、論文の中から、一見、無味乾燥なデータや組織写真の背後にある大いなる努力を読み取れるであろう。編集委員の役割は、単に論文のスタイルや内容の吟味のみならず、著者が投稿原稿に凝縮しようとしている、このような情熱を読者と共にわかちあえるようなプレゼンテーションを演出するお手伝いをするものであるというのが、ほぼ2年目を迎えた筆者の感想である。(Y. M.)